

# 大学教員のためのオンライン教育研修支援システム「MOST」

酒井 博之 田口 真奈 笹尾 真剛 大山 牧子\*

京都大学高等教育研究開発推進センター 京都大学大学院教育学研究科\*

## 1. はじめに

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、相互研修型 FD を活動理念として、学内外の教育改善や FD を推進するためのさまざまな取り組みをおこなってきた。これらの活動の共通する志向性は、大学教員の個人、集団、組織といった多様な層において、教育改善や FD に関わる個別の文脈に根ざしたローカルな知識を共有するような学習コミュニティ形成であるといえよう。またこのようなローカルな知識はしばしば分断された状態で存在しており、それらを相互に接続するネットワーク形成も同時に目指されてきた。これらの諸活動に対し、テクノロジーを活用した支援、促進ができないだろうかということが本実践研究の前提となる問題意識である。

## 2. これまでの課題と米国における先行事例

オンライン上に相互研修の場を構築することを目的として、2003 年度より「大学教育ネットワーク」を運用してきた。この取り組みの一つに、授業映像と電子掲示板を利用してウェブ上で公開授業・検討会をおこなう「Web 公開授業」がある(酒井ら 2008)。これまで組織を越えた約 50 名の大学教員が参加して活動をおこなってきたが、実践を通じて以下のような課題が明らかとなった。

まず、ウェブ上の公開授業実践を通じた大学教員コミュニティへの参加者の参入により、同心的なコミュニティ拡大が目指されてきたが、参加者が授業検討会へ能動的に関与することへの動機づけやその維持が困難であり、活発な活動が展開されにくい。第二に、参加者以外に成果が公開されないため、公開授業実践以外の諸活動へ知識や経験を還元できない。第三に、取り組みの総括の場がないなど、参加者が教授学習に関する新たに具体的知見を獲得したり、リフレクションが促進された実感を得にくい面がある。最後に、実践のテーマが運営者側から提示されるため、個別の多様なニーズに応えられない。

米国カーネギー教育振興財団における高等教育改善の代表的プログラムである CASTL プログラムでは、個人または複数組織における教育改善活動を、期間を設けた課題解決プロジェクトとして立ち上げ、財団スタッフの支援によって、それまで教室内の私的行為であった教育活動を、ピアレビューにより教員が相互に吟味できるよう教育実践を公開することを目指した取り組みを行った。こうした対面の活動をテクノロジーの面から支援するため、同財団知識メディア研究所が開発した KEEP Toolkit を使って教授学習の実践や課題解決のプロセスや成果をウェブ上に顕在化し教員コミュニティ内で共有する手段を提供している(Iiyoshi & Richardson 2008)。テクノロジーを活用した、組織を越えた大学教員コミュニティによる教育改善の取り組みは、ジョージタウン大学を中心として人文科学分野の教育改善をおこなう Visible Knowledge プロジェクトや、カンザス大学を中心としたコースポートフォリオの共有により教育改善をめざす Peer Review of Teaching プロジェクトなどにも見られる(Bass and Bernstein 2008)。これらの活動に共通するのは、対面での会合と合わせて、ウェブ上で教育実践に関するコンテンツを共有し、それに対して吟味する場を用意していることである。

### 3. MOST について

教育改善や FD の実践やその組織化を、オンライン上で支援、促進する仕組みとして、大学教員のための教育研修支援システム「MOST (Mutual Online System for Teaching & Learning)」を開発した。対象者は、大学教員および大学教員を目指す院生で、招待制のサイトとした。MOST では、日本語化した KEEP Toolkit とそのプラットフォームとして Sakai を利用した。

KEEP Toolkit は、MOST 内のツールとして登録者が自由に利用できる。教育実践や改善活動をブラウザ経由で「スナップショット」として表現し、公開設定（非公開、公開、公表）によってコミュニティ内外へのコンテンツの公開も可能である。目的や課題別のテンプレートを使用することで、利用者は活動プロセスをプロンプトに従って簡潔に記述できる。プラットフォームとして、Sakai 財団がオープンソースとして提供する Sakai 2.5.3 を採用し、その共同作業ツールを主に利用し、カスタマイズをおこなった。日本版は Ja Sakai が提供するバージョンを利用した。利用者は、MOST 内で自由に教授学習や FD 活動に関するコミュニティを立ち上げ、コミュニティ参加者間でコンテンツの共有や議論などができる。

MOST では、個人の作業、コミュニティ内での作業を行うための二種類の場を設けている。前者は「マイワークスペース」と呼ばれ、KEEP Toolkit を利用してスナップショットの作成、編集ができるほか、プロフィール閲覧、ユーザー招待、公表されたスナップショットの一覧表示、活動記事作成、コミュニティ作成などができる。後者は、コミュニティ内での活動記事作成、オンライン議論、スケジュール管理、電子リソースの共有などができる。

### 4. 今後の課題

既に稼働中の教育改善に関する対面コミュニティやネットワークの活動の効率化、加速化を促進することから MOST は活用されるべきであると考えられる。現在、以下のような課題がある。

- (1) 多忙な大学教員は利用するのだろうか。教育をオープンにすることで教育イノベーションが加速するという教育のオープン化 (Iiyoshi and Kumar 2008) の考えでは、「テクノロジー」「コンテンツ」に加え、教育実践の「ナレッジ」をオープン化することが目指されている。このような考え方が日本の高等教育に浸透することが必要であろう。
- (2) オンライン上の活動と組み合わせ、対面の会合や報告の場の設定が必要であろう。また、この活動を支援、ファシリテートするための人的リソースの存在も重要であろう。
- (3) MOST では、他者が利用、再利用できる形でのスナップショットの公開が、目指される活動の一要素であるが、初期の段階では質の高いコンテンツの作成が必要と思われる。日本の文脈に応じたテンプレートの開発や、コミュニティベースでコンテンツのレビューをおこなう仕組みが今後システムに組み込まれることが望まれる。

### 参考文献

- ・ Bass, R. and Bernstein, D. (2008) In Iiyoshi, T. and Kumar, M.S.V. (Eds.) *Opening Up Education*, MIT Press. Chap. 20
- ・ Iiyoshi, T. and Kumar, M.S.V. (2008) 同上, Introduction, 1-10
- ・ Iiyoshi, T. and Richardson, C.R. (2008) 同上, Chap. 22
- ・ 酒井博之, 山田剛史, 杉原真晃 (2008) オンライン公開授業実践における大学教員の「気づき」と「自省」、日本教育工学会論文誌、32(Suppl.), 57-60